

	電	子	展	示	会
		余	録		

『描かれた動物・植物—江戸時代の博物誌—』

たとえば野山に出かけて、見知らぬ美しい花を見かけたでしょう。誰もが自然に「この花はなんていう名前だろう?」と思うのではないだろうか。あるいは、海に出かけて見知らぬ魚を釣り上げたなら「この魚は食べたなら美味しいだろうか?」と思うのが人情というものだろう。

世情が変わっても人情はそれほど変わらないらしく、江戸時代のご先祖たちも似たようなことを考えていたらしい。昨年12月に公開した『描かれた動物・植物—江戸時代の博物誌—』([http://](http://www.ndl.go.jp/nature/index.html)

[www.ndl.go.jp/nature/index.html](http://www.ndl.go.jp/nature/index.html))は、そんなことを窺い知ることができる電子展示会である。

本展示は、磯野直秀氏（慶應義塾大学名誉教授）に監修を依頼し、当館が約7年ぶりに開催した同題の特別展示の電子版で、江戸時代の日本に花開いた博物誌（自然に産する万物の記録。当時は本草と呼んだ）の世界を凝縮して現代に再現したものである。動植物の彩色図譜を中心に構成したため、全体として華やかな印象となっている。本展示では、資料の解題に加えて展示資料に対する親しみを増すためのコラムを掲載したほか、「いろいろな見方・楽しみ方」として、人物名や動植物名など多様な角度からのアクセスを可能にする索引類を設けた。また、惜しくも会場で披露できなかった箇所もデジタル画像として掲載し、21点の資料については表紙から裏表紙までの

全ページの画像を収録している（「いろいろな見方・楽しみ方」にある全ページライブラリー）。

さて、この展示会を見るのに、あまり難しいことは考えなくてもよい。野山の花を見るように、釣り上げた魚を見るように、つ

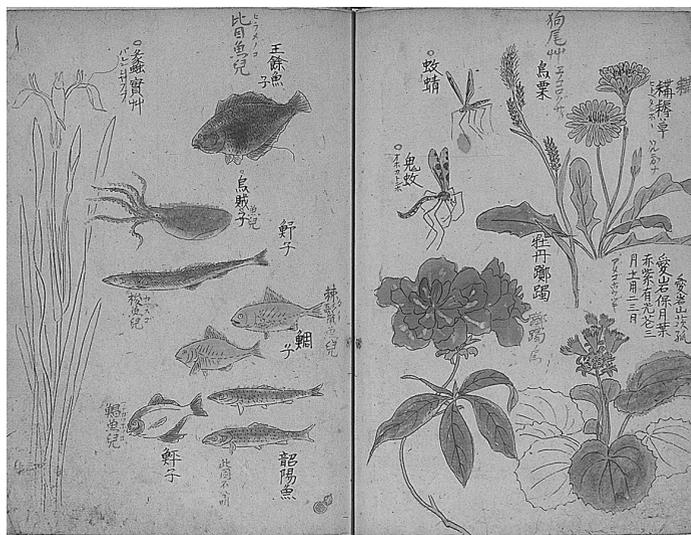
**描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌** ◆国立国会図書館  
◆ギャラリー

<p>序章 博物誌資料について</p> 	<p>第一章 江戸博物誌の歩み</p> 	<p>第二章 独自の園芸の展開</p> 	<p>第三章 珍禽奇獣異魚</p> 
---	---	---	---

◆ 展示にあたって      ◆ 江戸時代の博物誌の特色      ◆ コラム  
◆ コレクション紹介      ◆ いろいろな見方・楽しみ方      ◆ 「自然をみる眼」

▶リンク集   ▶参考文献   ▶ご利用について   ▶サイトマップ      Copyright ©2005 National Diet Library, Japan. All Rights Reserved.

まりは当時の人々と同じ目線で鑑賞するのが一番楽しいと筆者は思っている。全ページライブラリーにあるいくつかの資料を見てみよう。たとえばここに示した『東秀南畝識』では、草木の間に虫や鳥が飛び交い、隣のページを開



『東秀南畝識』昆留舎那谷著 享保16 (1731) 序 写本

けば魚やイカが泳いでいる。そしてそのすべてにいちいち名前が添えられているのだ。「これをいったい何図鑑と呼んだらよいのだろうか」という貧しい発想は、図書館員の職業病であろう。自然の1シーンを切り取れば、そこにさまざまな動植物が同居しているのは当たり前なのだから。一方、『王余魚図彙』はそれと好対照である。何しろ、巻物のどこを開いてもカレイとヒラメしか載っていない図鑑なのである。現代でもこれほどまでに特化した専門書は少ない。

このように、個々の人間がそれぞれの興味関心に逆らわず、自由闊達な眼で自然を見、それを記録するという気風は、江戸時代博物誌の特徴である。

したがってそれを鑑賞する側が「近代科学に比してどうだ」という観点で評することは大いに野暮天なのではあるが、実際のところ現代でも十分に学術書として通用するレベルの資料が存在することは特筆に値する。江戸時代の博物誌は、自然科学という営みが本来誰しものが参加できるはずの学問であることを教えてくれているのかもしれない。

この電子展示会も、それぞれの人がそれぞれの見方で鑑賞し、それぞれの感想を持てばよいと思う。博物誌の世界は、老若男女や学歴を問わず広く門戸を開放して、あなたの訪問を待っている。

(科学技術・経済課 田中俊洋)